

## 過渡期の中小企業審査 (融資審査の昔と今)

先日、ある中堅企業の財務担当責任者と話しをする機会があった。大分前「危ない」という噂も出ていた会社であるが、2、3年前から期間損益も黒字に転化し、話し振りにもうようやく危機を脱出した感じが受取れた。そして、今行っている大きな設備投資のファイナンス(資金調達)を何とかクリアした経緯を聞いて、「へー、なるほど。そうか、そうだろうな」と思った。彼の言葉の端々に、銀行の企業向け融資審査が今過渡期にあることを感じざるをえなかった。

その会社はまだ多額の繰越欠損を抱え債務超過の状態にある。既にある借入債務も驚くほど大きい。財務担当責任者も認めるように、銀行の債務者区分は破綻懸念先ではないにしろ多分要管理先である。そうした取引先が、強気の事業計画を立て設備投資借入の申込みをする。担保割れで自己資金もない。銀行はどう対応するだろうか。

予想通りと云うか当然と云うか、金融機関との交渉は難航した。決算状況(債務超過で借入過多)や担保状況等から判断すると「貸せない」案件である。今までの常識からすれば非常識な融資申込みだった。事業計画書の将来収益は返済可能という数値を示しているが、それは机上の計算に過ぎない。第一、今までこんなに赤字を作っているではないか。ということで、既存の取引銀行は尻込みした。

ところが「支援します」という銀行が現れた。それも今までたいした取引実績もない銀行である。担保も足りない、自己資金もない、がしかし既に期間損益は黒字に転化し黒字幅も拡大している。ここ数年で累損解消が可能であり、更にこの設備投資によって収益の拡大も見込める。それが融資に応じた銀行のざっくりとした論理である。つまり、提出した事業計画を、全面的に信用したかどうかは分からないが高く評価してくれたのだ。

この銀行の出現によって、「難しい」の一点張りだった既取引銀行の態度が微妙に変化した。しかし、担保がどうの、保証人がどうの、という姿勢は相変わらずで、遂には、融資する銀行としない銀行とに取引銀行が分かれてしまった。

この話しは非常に興味深かった。担保と保証が重要な位置を占めていた銀行の企業審査において、不動産担保の意味が急激に低下し、将来の収益をどう見積もるかが銀行融資審査と融資拡大の重要なファクターとなってきている現実がはっきりと伺えたからである。

勿論、旧来より理論や理屈では分り切っていた。借入金は担保や保証人で返済するわけではなく、企業が獲得するキャッシュフローが返済原資となる。だから「将来のキャッシュフローをどう評価するか」が企業審査の最大のポイントになるのは当然であり、建前上銀行もそう振る舞ってきた。しかし、実際は「将来の収益」等といった不確実なものより過去の実績(決算書)と担保・保証が重きをなしてきた。貸出稟議書に記載された「将来の収支計画」など、書く方も審査する方も殆ど信用していなかった。信用していたのは担保であり、確実な保証だった。

私が知っている限り、かつて融資を伸ばせる銀行員は不動産に強い銀行員だった。不動産をネタに融資を拡大していける人が有能な銀行員だった。しかし、不動産が下落の一途を辿るとそうした銀行員の存在感は薄くなり、替わってバブル期には片隅で小さくなっていった手堅い実務家肌の銀行員が伸してきた。しかし、そうした銀行員でも、過去データである決算書を分析したり評価したりすることはできても、企業自体を分析しその将来性を評価するなどできない相談だった。そうしたことは訓練してこなかったし誰も教えてくれなかったのだ。

今、銀行が企業向け貸出残高を減らしているのは当然のことである。景気が悪いとか資金需要がないとかいろいろ理屈を並べているが、最大の理由は担保となる不動産が大幅に下落したからである。そして、担保も持たず確実な保証もない企業の審査は難しくてもとにもできないからである。もっとはっきり云えば、ソフト化している経済の中で銀行の企業審査が時代遅れになっているからである。

銀行も遅ればせながら様々な取組み・実験を始めてはいる。しかし、無担保・第三者保証無しのビジネスローン程度(スコアリングシステム)でお茶を濁しているようではその将来は心許ない。違っているだろうか。